

旭木の駅① (愛知県)

3カ月で立ち上げ

「これを旭でやろまいか」

「彦平」の刺身なんか日本一高くてまずいぞ、とおやじが言う。だから俺も行ったことなかった。旭木の駅実行委員長の高山治朗さんが話し始める。「けど、モリ券の期限が切れそうだったので、しようがなく買いに行つた。そして、これがうまかつたんだなあ!」。

ねて、恵那市や智頭町の木の駅の話をした。林さんは全く動かない。地域と林業の将来を嘆いた。それが、私のノートパソコンで木の駅のTV録画を見るうちに顔色が変わつた。「これを旭でやろまいか」。

展開は早かつた。12月27日には約15人集まり準備説明会、1カ月後の1月26日には木の駅説明会で山主、商店、よそ者が40人近く集まり、3月5日のオープンが決まつた。こんなに短期間の立ち上げはその後も例がない。

**よそ者を受け入れる
度量と危機感**

旭木の駅の人材はバラエティに富んでいる。12年は「木の駅女子部」まで出現した。森林ボランティア

の活動も盛んだ。よそ者たちが超元氣なのだ。彼らを受け入れる度量と危機感がここにはある。旭町では小学校が一つ廃校になつたばかりだ。人口は3050人、小学校入学者数は15人にまで減少した。そんな中でインターナショナルが一昨年に続き昨年も一組、村の神社で結婚式を挙げ地元の人たちの祝福を受けた。そんなよそ者と地元をつないでいるのがNPO法人スローライフセンター事務局

長の西川早人さん。林さんと一緒に地域に声をかけ木の駅を立ち上げていった。

集まつた木材は製紙パルプチップ会社が3000円/トで引き取ることになった。出荷者に支払う6000円/トとの逆さや(過払

い分)はNPOの自己資金と寄付で賄うこととなった。大口寄付があった。市民団体の「組手仕おかげまし東海」が10万円の寄付を申し出た。組手仕は製材端材を活用した組立キット。その代金の5%を木の駅の立ち上げや運営に支援することにした。さらにチップ会社の社長や地元の旅館や土建屋さんをはじめたくさんの人々が寄付を持ち寄つた。

そうして始まつた第1期は3月5日~3月27日、出荷者30人、商店19店、出荷量90tだった。第1期のモリ券長者が、14t出荷した高山さんだった。

出荷量トップは 40年ぶりのUターン者

高山さんは、2010年長男の就農を機に会社を58歳で退職して、40年ぶりに実家のある旭町に戻つてきた。そんな矢先に木の駅が始まつた。「息子は自然薯の専業で俺は田んぼや畑、それに山をやることにした。とはいふものの、チ



◀旭木の駅のオープン日。2011年3月5日



◀旭木の駅実行委員長の高山治朗さん。オープンから20日間ほどで14tを出荷



◀「これまで来なかった地元のお客さんが来たようになった」。地元商店主の一人、糟谷勝商さん

「彦平」店主の糟谷勝商さんは、「木の駅でこれまで来なかった地元のお客さんが来るようになった。」と振り返る。

いまや高山家の御用達になった

エーンソーも使えなかったのが秋にとよた森林学校に入って習った。それでさっそく間伐を始めた時、ちょうど木の駅が始まったってわけさ。モリ券は面白い。心が贅沢になるなあ、ついつい大買いしてしまう」と振り返る。

オヤジ達はモリ券で豪快にお酒と刺身を買っていく。それがこの頃ちよつと変わってきた。奥さんたちがモリ券で買い物するようになってきたぞ」と笑う。

3年目4期目に入って出荷者は52戸に、商店は30店を超し、約300万円分のモリ券が町を潤した。木の駅が暮らしに浸透してきた。これまでの3期でモリ券長者ベス

旭地域の
森林所有者等

間伐材等の搬出

材は長さ50cm以上、径5cm以上



軽トラ2車で約1t

登録

6000円/t モリ券(地域通貨)

寄付支援 3000円/t

志材(寄付材)
ファンクラブ
木の駅女子部
森林ボランティア

商品

モリ券

木の駅



旭木の駅プロジェクト
実行委員会

【構成員】

- ・出荷者
- ・商店
- ・NPOや研究者
- ・豊田市旭支所 etc

販売

3000円/t

売上代金

モリ券

現金

↑登録

旭地域の 商店



ト3は毎回入れ替わり、新しい人が加入して競い合っている。一方、商店ベスト1は毎回森林組合購買部で、ソーチェーンやトビがよく

売れるようになった。遠かった森林組合が近くなった。そして行政も連鎖する。(つづく)

▲「木の駅」のシステム概念図